

「建築士ソルネス」(ヘンリック・イプセン)

ハルワルト・ソルネスは名聲赫赫たる大建築家であつた。が、實は人知れず深刻な恐怖や苦惱を心中に宿してゐた。まづ、己れに取つて代はらうとする若い世代の擡頭を恐れてゐたから、自分の建築事務所の若い製圖係が建築士として獨立を望むのをひどく嫌つた。製圖係の父親のプロヴィック老人は嘗てはソルネスの雇主の建築家で、今は落魄してソルネスの雇人となつてをり、病身の爲死ぬ迄に息子の獨立した姿を見たいと切望してゐたのだが、ソルネスは父子の切なる願ひを冷酷に斥ける。

亦、彼は妻アリーネへの呵責の念にも苦しんでゐた。夫婦は新婚當時、妻が母親から譲り受けた屋敷で暮してゐたが、十二三年前、その屋敷が焼失した。するとソルネスは焼跡の廣い敷地を住宅地に分割し、好みの住宅を次々に建築して、今日の名聲の足掛りを作つた。他方、妻は火事騒ぎの中寒空の下に逃出して高熱を發し、二人の乳飲子に乳をやれぬ身となるが、「母

親の義務だから」として「自分で面倒を見るといつてきか」ず、擧句に赤ん坊が二人共死んで了ふ。爾來、妻は寔れ切つて黒服を着續けてゐた。然るにさういふ妻の姿を目の邊りにしながら、ソルネスは只管己が「仕事を押し進め、成功に導く」事のみに没頭して、遂に「建築王ソルネス」なる名聲を獲得するが、その一方、妻への「負債」の思ひは募るばかりであつた。それに亦、彼の得意とする、明るい家庭を作る爲の住心地の良い家を建てる度に己が家庭の不幸を顧みずにはゐられないし、何よりも、自他の幸福の「犠牲」の上に獲得した成功の「代價」に苦しまずにはゐられない。

そんな或日、ヒルデといふ若い女が現れる。十年前、ソルネスがさる寺院の高い塔を建て、天邊に昇つて風見に花束をかけた時、小娘だつたヒルデは感動して「建築王ソルネス！」と叫んだ。ソルネスは彼女に接吻して、十年後に彼女の爲に素晴らしい「王國」を建設してやると約束するが、ヒルデはそれを忘れずにやつて來たのだ。そして、己が苦惱を告白するソルネスに向つて、「病的な良心」を拂拭し、プロヴィック父子を解放してやつて、この自分の爲に「王國」よりも素晴らしい、「世界中で一番高いお寺の塔を建てて」欲しいと切望する。創造慾を掻立てられたソルネスは悶々を吹つ切つて、神の思召しに叶ふ「この世に最も美しい」建物を作

ると決心する。

しかし、焼けた屋敷跡に妻の爲に建設した新宅の完成を祝ふ式典の日、その家の目眩めく塔の天邊にソルネスは昇り、風見に花束を掛けて帽子を振つた途端、石切場に眞つ逆様に顛落して了ふのである。

晩年の大藝術家の内面を剔抉した、イプセン最後期の作品である。己が心中には「魔物」がある。己がソルネスは云ふが、全てを犠牲にしても己が夢の實現を願ふ「魔物」の力に最後迄彼は驅立てられ、破滅する。或時、彼はヒルダに、自分が立派な建築家となる道が切開かれる切掛として、「煙突のひび」が原因となつて夫婦の屋敷が「炎の渦に巻きこまれ」るのを密かに「想像」してゐた事があると打明ける。成功を願ふ「魔物」の情念の根底に潛む邪惡な欲望を彼は自覺してゐた譯だが、神に嘉される藝術を完成したいとの最後の頗る高尚な夢も、遂には神に嘉されぬ不遜の産物でしかない、ソルネスを惨死せしめて作者は云ひたかつたのか。それはともかく、二十世紀アメリカの大作家ロバート・ペン・ウォーレンは、或時、作家としての平生の心懸けを問はれて、「正直である事、出来る限り上手に表現する事、その二つだけだ」と答へた。イプセンも同じやうに答へたかも知れない。

（菅原卓譚、「イプセン名作集」、白水社）